

青森県における調査結果概要

オオセッカ・イヌワシが生息するなど、鳥類にとって貴重な環境を持つ。

【青森県内調査結果概要】

青森県内の馬淵川で魚介類調査と底生動物調査を、高瀬川・岩木川及び浅瀬石川ダムで鳥類調査を実施しました。

馬淵川は、平成 15 年度に魚介類・底生動物を調査した全国河川のうち、魚類の確認種数から、多様な生息環境を持つ重要河川といえます。

魚 類 43 種 (17 位/43 河川)

底生動物 145 種 (18 位/25 河川)

高瀬川・岩木川及び浅瀬石川ダムは、平成 15 年度に鳥類を調査した全国

河川・ダムのうち、確認種数で上位に位置し、全国的に見ても多様な生息環境を持つ重要河川・ダムといえます。

高瀬川 124 種 (5 位/31 河川)、岩木川 117 種 (7 位/31 河川)

浅瀬石川ダム 90 種 (6 位/29 ダム)

青森県河川・ダム概略位置図



【既往調査との比較】

馬淵川では、今回の調査でオオクチバス（ブラックバス）が初めて確認され、青森県内の一級河川全てでオオクチバスが生息することとなり、人為的な影響による外来種の侵入・生息拡大が見られます。

高瀬川・岩木川では、世界的に幻の鳥と言われたオオセッカ（絶滅危惧 B 類）が確認されております。特に高瀬川周辺に位置する青森県三沢市の仏沼干拓地は、オオセッカの国内最大の繁殖地と呼ばれるなど、オオセッカを知る有識者には有名な場所です。

また、日本に生息するオオセッカのうち 2～3 割が高瀬川と岩木川周辺に生息していると言われており、今後も現状の良好な河川環境を維持する必要があります。

浅瀬石川ダムでは、イヌワシ（絶滅危惧 B 類）が新たに確認され、更に日本で絶滅の恐れがある特定種の確認種数は、全国で最も多い結果となり、良好な生息環境であることがわかります。

岩手県における調査結果概要

岩手県の鳥類相には大きな変化はなく良好な河川環境が保たれている。ダム湖周辺の植物環境は、貴重な種が多く分布していることが判明。

【岩手県内調査結果概要】

岩手県内の北上川上流で鳥類調査を、四十四田ダム・御所ダム・田瀬ダム・湯田ダム・石淵ダムで植物調査を実施しました。

北上川（宮城県含む）は、平成15年度に鳥類を調査した全国河川のうち、確認種数で2位であり、全国的に見ても多様な生息環境を持つ重要河川といえます。

北上川 140種（2位/31河川）

四十四田ダム・御所ダム・田瀬ダム・の確認種数を見ると全国的に見ても上位に位置し、多様な生育環境にあるようです。

四十四田ダム 790種（8位/20ダム）、御所ダム 905種（2位/20ダム）、
田瀬ダム 834種（5位/20ダム）、湯田ダム 660種（14位/20ダム）、
石淵ダム 621種（16位/20ダム）

【既往調査との比較】

北上川では、魚類を餌とするミサゴ（準絶滅危惧）が岩手県の北上川流域ほぼ全域において確認され生息域を拡大している傾向がわかりました。動植物の関係（食物連鎖）で上位に位置するミサゴの生息域が拡大していることから、生息するための豊かな自然環境が保全されているため、北上川上流域の鳥類の生息状況が安定した環境であることがわかります。

岩手県におけるダムの植生環境は、これまでのダム湖及びその周辺域の生物相の把握に加え、そこに分布する動植物と生育・生息環境との関係を把握するため、調査地点等の設定方法を変更し、調査範囲を拡大したことにより、ダムにおいて、良好な自然の指標である貴重な植物が多く分布していることが伺えます。特に、日本で絶滅の恐れがある特定種の確認種数は、全国で多い順から、田瀬ダム、御所ダム、四十四田ダムとなっており、上位を占めています。

岩手県河川・ダム概略位置図



宮城県における調査結果概要

名取川・釜房ダムでブタクサハムシが初めて確認されるなど、都市河川や人為的影響を受けるような場所では、外来種に注意が必要。
釜房ダムではダム堤体などの人工構造物をコウモリ類が利用している。

【宮城県内 調査結果概要】

宮城県内の阿武隈川で両生類・爬虫類・哺乳類調査を、名取川で陸上昆虫類等調査を、鳴瀬川で魚介類調査と底生動物調査を、北上川で鳥類調査を実施しました。

阿武隈川（福島県含む）は、平成15年度に両生類・爬虫類・哺乳類を調査した全国河川のうち、確認種数で上位に位置し、全国的に見ても多様な生息環境を持つ重要河川といえます。

- 両生類 10種（3位/31河川）
- 爬虫類 10種（3位/31河川）
- 哺乳類 22種（1位/31河川）

名取川は、平成15年度に陸上昆虫類等を調査した全国河川のうち、中間的な生息環境を持っている河川といえますが、都市河川であることから人為的な影響等、今後の環境変化に注意が必要です。

陸上昆虫類等 875種（18位/27河川）

鳴瀬川は、平成15年度に魚介類・底生動物を調査した全国河川のうち、確認種数で上位に位置し、全国的に見ても多様な生息環境を持つ重要河川といえます。

魚類 53種（11位/43河川） 底生動物 220種（11位/25河川）

北上川（岩手県含む）は、平成15年度に鳥類を調査した全国河川のうち、確認種数で上位に位置し、全国的に見ても多様な生息環境を持つ重要河川といえます。

北上川（岩手県含む） 140種（2位/31河川）



宮城県内の七ヶ宿ダムで陸上昆虫類等調査を、釜房ダムで両生類・爬虫類・哺乳類調査と陸上昆虫類等調査を、鳴子ダムで魚介類調査と底生動物調査を実施しました。

七ヶ宿ダムの陸上昆虫類等の確認種数を見ると全国的に中位に位置しています。

陸上昆虫類等 1,407 種 (12 位/29 ダム)

釜房ダムの両生類・陸上昆虫類等の確認種数を見ると全国的に上位に位置し、いずれの調査結果を見ても多様な生息環境を持つ状況といえます。

両生類 10 種 (6 位/22 ダム)、爬虫類 7 種 (15 位/22 ダム)

哺乳類 18 種 (10 位/22 ダム)、陸上昆虫類等 1,613 種 (7 位/29 ダム)

鳴子ダムの魚介類・底生動物の確認種数を見ると全国的にほぼ中位に位置しています。

魚類 21 種 (8 位/18 ダム)、底生動物 106 種 (13 位/17 ダム)

【既往調査との比較】

名取川では、河畔林のエノキやエゾエノキを幼虫の食樹とするオオムラサキ(準絶滅危惧)が、鳴瀬川では中・下流域で水質が良く比較的流れの穏やかなところを好むタナゴ(準絶滅危惧)が初めて確認されるなど、良好な水辺環境であることが見受けられます。

また、北上川ではラムサール条約で知られる伊豆沼・内沼が、周辺に位置していることから、コクガン(絶滅危惧 類)、マガン(準絶滅危惧)等、ガン・カモ類が既往調査同様に確認されております。

都市河川として人為的な影響が懸念される名取川及び釜房ダムでは、全国的に生息環境を拡大させているブタクサハムシが新たに発見されるなど、河川環境について今後の注意が必要と考えられます。

七ヶ宿ダムでは、スジグロチャバネセセリ(準絶滅危惧)が平成15年に調査した29ダムのうち、唯一確認されました。

釜房ダムでは、既往調査同様に、日本の国蝶であるオオムラサキ(準絶滅危惧)が確認されました。また、コウモリが堤体内監査廊などで確認され、人工構造物を一時的なねぐらに利用していることが明らかになりました。

鳴子ダムでは、魚類のスナヤツメ(絶滅危惧 類)、底生動物のモノアラガイ(準絶滅危惧)が既往調査同様に確認されました。外来種はニジマスが新たに確認されました。

宮城県における阿武隈川、名取川、鳴瀬川、北上川、七ヶ宿ダム、釜房ダム、鳴子ダム、河川・ダム湖共通で全体的に見ても、動植物とも生息環境に大きな変化は見られなかったため、生息生育環境が安定していることがわかりました。

ラムサール条約とは、正式名称を「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」といい、1971年、カスピ海沿岸イランのラムサールで採決されたことから、通称「ラムサール条約」とよばれています。

秋田県における調査結果概要

米代川・玉川ダムでツキノワグマを確認。
雄物川上流の河川・ダム湖を含む水辺に、新たな外来種確認。
玉川ダムでヤマネ・カモシカを確認。

【秋田県内 調査結果概要】

秋田県内の米代川と玉川ダムで両生類・爬虫類・哺乳類調査を、雄物川上流で陸上昆虫類等の調査を実施しました。

米代川は、平成 15 年度に両生類・爬虫類・哺乳類を調査した全国河川のうち、確認種数で上位に位置し、全国的に見ても多様な生息環境を持つ重要河川といえます。

両生類 12 種(1 位/31 河川)

爬虫類 4 種(26 位/31 河川)

哺乳類 16 種(4 位/31 河川)

雄物川上流は、平成 15 年度に陸上昆虫類等を調査した全国河川のうち、雄物川下流を除いた現状でも確認種数で上位に位置し、全国的に見ても多様な生息環境を持つ重要河川といえます。

陸上昆虫類等 2,059 種(2 位/27 河川)

玉川ダムの確認種数を見ると全国的に上位に位置し、全国的に見ても多様な生息環境を持つ状況といえます。

両生類 11 種(3 位/22 ダム)、爬虫類 8 種(12 位/22 ダム)

哺乳類 20 種(5 位/22 ダム)

【既往調査との比較】

米代川では、ツキノワグマが初めて確認されるなど、近年里地での目撃例が増えていることを裏付ける結果が見られます。

雄物川上流では、礫州・落葉樹林を伴う山地の裾野など、調査地区の良好な環境に起因して確認種が増えるなど、多様な生息環境が健全に維持されていることが確認された反面、全国的に生息範囲を拡大させているブタクサハムシが新たに発見されるなど、河川環境について今後の注意が必要です。

玉川ダムではヤマネ(準絶滅危惧)やカモシカ(国指定特別天然記念物)が確認されるなど、良好な水辺環境が保全されていることが伺える反面、ハクビシンが確認されるなど、外来種の侵入がみられます。

秋田県河川ダム概略位置図



山形県における調査結果概要

最上川及び赤川の河川・ダム湖を含む水辺では、鳥類相に大きな変化はなく良好な河川環境が保たれている。

【山形県内 調査結果概要】

山形県内の最上川、赤川の2河川及び、最上川上流の寒河江ダムと白川ダム、赤川上流の月山ダムにおいて鳥類調査を実施しました。

最上川及び赤川は、平成15年度に鳥類を調査した全国河川のうち、確認種数で上位に位置し、全国的に見ても多様な生息環境を持つ重要河川といえます。

最上川 130種(4位/31河川)

赤川 119種(6位/31河川)

寒河江ダム、白川ダム、月山ダムでは、確認種数を見ると、全国的に中間的な鳥類相の環境が形成されているといえます。

白川ダム 84種(9位/29ダム)

寒河江ダム 80種(13位/29ダム)

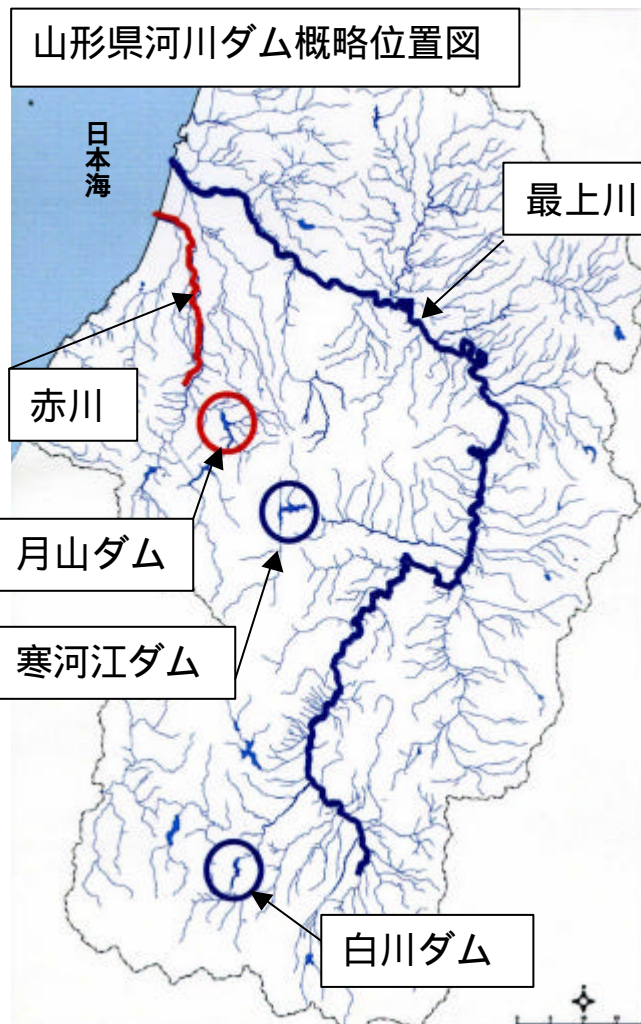
月山ダム 56種(21位/29ダム)

【既往調査との比較】

最上川では、下流部の草地で初めてコジュリン(絶滅危惧類)の生息が確認されております。また、赤川沿川のヨシ群落は、ヨシキリ類の良好な繁殖環境として維持されていることが確認されております。

寒河江ダム及び白川ダム周辺では、既往調査同様にミサゴ(準絶滅危惧)の営巣地が確認されています。特に白川ダムでは、鳥類の繁殖確認数が最も多い結果となった他、今回初調査となった月山ダムではハチクマ(準絶滅危惧)が確認されるなど、周辺に生息する鳥類の良好な生息環境となっております。

河川・ダム湖共通で見ても、鳥類相に大きな変化は見られず、山形県の鳥類の生息状況が安定した環境であることがわかります。



福島県における調査結果概要

阿武隈川上流及び三春ダムの水辺では、両生類・爬虫類・哺乳類の棲みやすい良好な河川環境が保たれている。

福島県河川ダム概略位置図

【福島県内 調査結果概要】

福島県内の阿武隈川上流及び三春ダムにおいて両生類・爬虫類・哺乳類調査を実施しました。

阿武隈川（宮城県含む）は、平成 15 年度に両生類・爬虫類・哺乳類を調査した全国河川のうち、確認種数で上位に位置し、全国的に見ても多様な生息環境を持つ重要河川といえます。

両生類 10 種(3位/31 河川)

爬虫類 10 種(3位/31 河川)

哺乳類 22 種(1位/31 河川)

三春ダムの確認種数を見ると全国的に両生類・爬虫類は上位に位置しております。

両生類 10 種(6位/22 ダム)、爬虫類 9 種(6位/22 ダム)

哺乳類 13 種(22位/22 ダム)



【既往調査との比較】

阿武隈川上流及び三春ダムでは、生態系上位種である爬虫類のシマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシが既往調査同様に確認され、河川・ダム湖共通で見ても、両生類・爬虫類・哺乳類の生息状況に大きな変化は見られず、生息環境が安定していることがわかります。